

演題「iPS細胞がつくる新しい医学」

平成20年5月26日 ベルクラシック甲府

京都大学再生医科学研究所助教 中川誠人氏

ヒトやマウスの受精卵に由来する胚性幹(ES)細胞は様々な細胞へ分化できる多能性を維持したまま、大量培養できることから、脊髄損傷やパーキンソン病などに対する細胞移植療法の資源として期待されています。しかしヒト受精卵の利用には反対する人も多く、ES細胞の利用には慎重な運用が求められています。また患者さんへ移植した後の拒絶反応も問題となります。私たちは大人の皮膚細胞に少数の遺伝子を導入することにより、ES細胞に類似した人工多能性幹(iPS)細胞を樹立しました。患者本人の細胞からつくることができるiPS細胞は、ES細胞の持つ倫理的問題や拒絶反応という問題を回避できる可能性があります。また病気の研究や、より有効で安全な薬の開発にも役立つと期待されます。